

## 魂の行へ（民謡）

太田 赤童

山の夜の静けさ

牙え切つた数知れぬ星

巨獣の眠てるやうなだんまりの嶺

永久の存在は、

自然？

人生？

神祕主義者は自然に驚異を求めた、

自然主義者は人生に裸體を求めた、

醜い主義者は次から次へと

いろいろの騷擾を醸しつゝ……。

大生命の壺をさゝげて

跣跟めきつ何處へ何を求めて、

あなあわれ……

魂の香泌む壺とも知らで

青き月の光りに

森の奥深く影は次第に消えゆく。

（一一、九、二六）

## 調落の初冬

小松 觀學

樹々は日々に衣を剝がれて慄えて居る

風は面白そうに落葉を轉かして驅けて行く

薪を負ふた女は白い息を吐きながら通る

後からからくゝと落葉が走つて行く

荒涼たる山路！……。

向ふの山々は疲れ果てた太陽の弱い日脚を受けて茜

に

染まりながら暮れを惜しんで居る

そして初冬に這ひ寄つて來たのである

と遠くで夕鐘を撞いて居る。

## 遠くなります（七面山）

結城 光

遠く鳴ります

あらゝぎ山に

鐘は寒空

遠茜。